

Necessity of Re-wear

服飾史家・中野香織さんと考えました

「着直し」こそが、今の時代に必要とされる おしゃれの美学

世の中のファッションは、トレンドが毎シーズン移り変わる時代から、
タイムレスなデザインを新しい価値として自由に楽しむ流れに。
そこで必要なのは、価値あるものを見極められる個人個人の審美眼。

「レッドカーペットに姿を現すセレブリティを見ても、長く愛用できるデザインを
自分らしく着直す。様子がキャッチされています。その根底にあるのは、
持続可能なライフスタイルの体現と、上質な衣装を何度も着用することでの
経済的、倫理的な責任をもつ姿勢です。さまざまなブランドもサステイナブルを
推進しており、素材へのこだわりはもちろんのこと、時代を超えて愛される
デザインをスタイリングの創造性で新鮮にアップデートするコレクションが増加。
例えばワンピースにパンツを組み合わせるなど、かつてのタブーを破る着こなしが
今は新しい価値として受け入れられる時代になっているので、
同じアイテムでもひとりひとりの個性が際立つ着こなしが楽しめ、
クリエイティビティが発揮できるはずです。スタイリングで手もちの服を
新鮮に見せるという視点は、着直し、の進化形といえるでしょう」

また着直しは、今に始まったことではないと中野さん。

「18世紀のロブ・ア・ラ・フランスで使われている生地は
貴重品であったことから、オーバースカートをぎゅぐゅと縫うことで、
再利用がしやすい仕上げていました。また日本の伝統衣装である着物は、
着直しを前提とした最たるものです。布地をカットせず一枚布の特性を最大限に
活用する着物文化には、ひとつのものを大切に長く使うという精神があります。

帯と小物を替えるだけでまったく異なる印象をつくり出せるので、
一枚を繰り返し着ることに対する抵抗はなく、むしろ上品という価値観に。

母から娘へ、娘から孫へと世代を超えて受け継がれることで、
家族の物語を伝承する役割も担っています」

まさに着直しとは、服を通して知る自分が生きてきたストーリーであり、

未来のファッションをどうつくり、使い、共有するかを問う重要な出発点。

着直しこそが、未来のファッションと人々を結びつける橋渡しになるはずです。

Profile

中野香織・なかの かおり 服飾史家。『イノベーター』で
読むアパレル全史 増補改訂版『(仮タイトル)』を5月に出版
予定。2025年1月より、ラヴジュアリー文庫で日本の伝統
卓越技術を支援する「無垢会」のアドバイザーを務める。